

## ローマ人への手紙 1章 1-17

聖書は書き手が聖霊（三位一体の神自身）で満たされて書かれている。（2 テモテ 3:16/2 ペテロ 1:21）そのため「いろんな時代の多くの個性」を通して神が書いたものと言える。。

また、聖書は今も生きる言葉。（ヘブル 4:12）なので、受け取り手は、その時代の人々を通して、今の時代を生きる僕ら。

つまり、

ローマ人への手紙はパウロを通して**神が送り**、ローマの人々を通して**今の僕たち**が受け取る御言葉

v7 受け取り手（今の僕たち）のことを神はどう呼んでいるか？

- ①「神に愛されている人々」
- ②「聖徒」→神の目に聖なるもの。
- ③主イエス・キリストから恵みと平安を受け取る人。また受け取るように祈られている人。

v 9-11

パウロはまだローマの教会の人々を訪問していない。

V12-15

パウロの手紙を書く動機

- ① **励ましたい**。また励まされたい→イエスにおける交わりと霊的成長をともにしたい。（V12）
- ② **すべての人に負債を返したい**。→かつてキリスト者を迫害していた自分の歴史を人に対して人生を通してあがなわないといけない「負債」と感じている。（v15）
- ③ **福音を伝えたい**。→イエスにダマスコへの道のりで命じられた「世界に福音を伝えよ。」という使命を果たしたい。

※特に②の自分の過去への思いは、パウロの手紙で、イエスの福音から律法にそれる人、イエスとともに歩まない人への厳しい言葉を使う時に、クリスチャンになる前の過去の自分を重ねて語っているように思えます。

v 16 「福音を恥としない」

福音を恥とする例。

→僕らはイエスを語ろうとするとき「宗教ボケしている？」「人間関係が壊れるかも・・・」と福音を恥ずかしいものように扱う。

パウロ自身もイエスをローマの王に語った時「勉強しすぎて気がくるっているぞ!!」と言われた。（使徒 26:24）

v 17 「義人は信仰によって生きる。」

ハバクク書 4章 2節からの引用。

義人→神の前で正しい人とされる→神が 100%OKって評価してくれ、神からの祝福、恵みを 100%うける人

「義人は信仰によって生きる。」をかみ砕いていうと。

→神の前で正しいとされるためには、人がどんな清い行い、修行、聖書勉強を積み重ねても届かない。ただイエスを信じることのみしかない。

ユダヤ教の律法学者としてパーフェクトの評価をもらい、エリートコースを駆け抜けていたパウロ。そして 15-6 世紀のドイツでカトリックの修道士として「キリスト者の中で、行いにおいて、最も御国で評価される修道士を選べと言われたら彼である。」と言われていたルター。彼ら 2 人は同じ「渴き」の中にいた。「いくら徳を積んでも、今日、主の日が来てさばきがあった時、自分が御国に本当には入れるのだろうか？」つまり「自分が神の前でよいこととして重ねているこの行いは、本当に神は評価しているのだろうか？」という渴き。

その中から、このハバクク 4:2/ローマ 1:17 に出会った。

## パウロ VS ヤコブ ?

### ○パウロ

「義人は信仰によって生きる。」(ローマ 1:17)

「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰による。(ローマ 3:28)」

### ○ヤコブ

「信仰も、もし行いがなかったら、それだけでは、死んだものです。」(ヤコブ 2:17)

パウロ:「行いでは救われぬ。イエスを信じる信仰のみ。」

ヤコブ:「行いのない信仰は死んだ信仰」

2人の神学は一見正反対のことを言っているように見える。

## 考察

○パウロは自身の神学で「信仰による行い」を否定していない。

「・・・愛によって働く信仰だけが大事なのです」(ガラテヤ 6:5/パウロが書いた手紙)

「救われる」=神の前に正しいものとなる。=クリスチャンとなる には「イエスを信じる以外」道はない。  
信じるだけでOK

でも、

クリスチャン(イエスを主とし、しもべ)となったあと、イエスのくれたたった一つの戒めをしないなら、または、できるようになりたいと生活しないなら、クリスチャンとして歩んでいるとはいえない。

「イエスのたった一つの戒め」

→「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合うこと、これが私の戒めです。」→「・・・それを行うなら、あなたがたはわたしの友です。」(ヨハネの福音書 15:12-14)

※ 「イエスの友」=イエスと一緒に歩むパートナー。仲間。

<例>

・車の免許を取るには(救われるには)、イエスを信じるだけでOK。でも免許を取っても一度も車に乗らないなら、ドライバーとは呼べない。

・日本国籍を取るには(救われるには)、イエスを信じるだけでOK。でも日本にも来ない、日本で住民票を持つ、保険に入るといった日本人としての生活をしないなら、「日本人」とは言えない。

Etc...

**考察2**：パウロ、ヤコブはともに「偽の教え」「異端の教え」と戦っていた。外の異端と中の異端。

パウロの敵→ 外の異端：パウロが伝道した外国での異端の教え

「救われる」には、イエスを信じることで、キリストの十字架で流してくれた贖いの血だけでは不十分。それプラス「自らの行い」が必要と、イエスの十字架が神の前で完全なものでない。とする教え。

ヤコブの敵→ 中の異端：エルサレム内、初代教会内での異端の教え。

いままで、たくさんの律法で縛られた生活をしてきたユダヤ人から、クリスチャンになった人たちが、「イエスさえ信じていれば、なにしたらってOK。」とキリストにならう人生に興味を持たない人たち。

<補足1>

ルターは若いとき、ヤコブ書を、読む価値のない「わらの書」と言う。

その時代を揺り動かす、政治とぴったりくっついた中世カトリックの教え「御国に入るには、イエスの血+日々の正しい行いが無い（国王、教会に従わないと）と入れない。現世の罪は罪がなくなるお札を買って帳消しにしないと入れない。」をひっくり返すために、民衆から神学者、教父、すべての人にインパクトのある言葉が必要であった。

「神学的見地から・・・歴史的、聖書的考察とそれらの解釈の・・・云々云々・・・」ではほとんどの人の心に残らず、注目もされない。というがつんと「ヤコブ書はカスじゃっ!!」（暖炉で燃やす藁と同じ）のほうが強烈。

→のちにルターはこの自分の言葉を改めている。

<補足2>

ヤコブ書のヤコブ→12使徒ではなく、イエスの弟との説が歴史的に聖書学者の一般的見解。

※イエスの弟→マリアとヨセフの間に生まれた4人「ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダ」（マタイの福音書 13:55）